

平成 26 年 6 月 18 日

試掘調査の結果について（概要）

府中城跡試掘調査報告

所在地：越前市府中一丁目13番7号

調査担当：越前市教育委員会 文化課 野澤 雅人

調査期間：平成26年5月7日(水)～19日(月)

試掘調査面積：約85 m²

調査の概要と結果

調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「府中城跡」の範囲に含まれている地点であり、工事内容は新市庁舎の建設工事である。当該地は天正三年に前田利家によって築城された府中城跡として知られている場所である。新市庁舎の配置についてはまだ計画段階ということもあり、確定していないが、今回の試掘範囲が配置内に含まれる可能性は高い。

調査は届出範囲内に10m～15m間隔で約2m×4.25mの箱堀を行う方法で実施した。箱堀を行った箇所は10箇所である。以下、各地点の状況を簡単にまとめる。

第1地点 地表より1.1mは盛土であり、その下には40cm程度の厚さで砂利を多く含む暗褐色土が堆積していた。それ以下は砂利盤であった。遺物は検出されなかった。

第2地点 地表より100cmは盛土であり、その直下から明黄褐色土層が40cmの厚さで堆積していた。遺構は検出されなかったが、遺構面である可能性が高い。それ以下は黄褐色の砂利層(40cm)、オリーブ褐色粘質土(80cm)と続き、明黄褐色粘質土(地山)が検出された。この地山面では、北に向って落ち込みが検出された。遺物は須恵器、越前焼、土師器皿等の破片が検出された。

第3地点 地表より200cmは盛土であり、その直下から灰色粘質土が130cmの厚さで検出された。その下は砂利盤であった。遺物は盛土中からの出土であったが、五輪塔の地輪と思われる石造物の一部が発見された。そして灰色粘質土からは布目瓦等の破片が見つかった。

第4地点 地表より145cmは盛土であり、焼土や炭化物などを多く含んでいた。これらは武生で度々起こった大火の痕跡である可能性が高い。その直下から灰色粘質土(40cm)、褐色土(40cm)と続き、砂利盤が検出された。遺物は越前焼、土師器皿、白磁等の破片が検出された。

第5地点 地表より100cmは盛土であり、第4地点と同様の様相であった。それ以下は明黄褐色土(15cm)、灰色粘質土(15cm)、暗赤褐色砂利層(7cm)、青灰色粘質土(18cm)、明青灰色粘質土(5cm)、暗灰色粘質土(10cm)、褐色砂質土(7cm)、青灰色粘質土(35cm)、明青灰色粘質土(30cm)と続き、砂利盤(地山)が検出された。この地山面では、北に向って落ち込みが検出された。遺物については、暗赤褐色砂利層下の粘土層から、サザエの蓋、布目瓦、越前焼、土師器皿、白磁、須恵器等の破片などが検出された。

第6地点 地表より60cmは盛土であり、それ以下は暗灰色粘質土(10cm)、褐色土(35cm)、明黄褐色土(15cm)、暗褐色砂利(10cm)と続き、明黄褐色土(地山)が検出された。明黄褐色土(地山)は40cm程度の厚さがあり、その下は砂利盤(地山)であった。この地点での層位は、全体的に東から西に向って急激に下がっており、西に向って大型の落ち込みがあることが分かった。遺物については、地表から60cmのところ¹に越前焼の埋甕が検出された。他には越前焼、土師器皿、白磁の破片などが検出されている。

第7地点 地表より55cmは盛土であり、それ以下は褐色土(90cm)、灰色土(40cm)と続き、明黄褐色土(地山)が検出された。この灰色土は遺物(土師器皿)を含んでおり、上層が攪乱されているため明確には断定できないが、遺構である可能性がある。遺物については、越前焼、土師器皿、須恵器等の破片などが検出されている。

第8地点 地表より75cmは盛土であり、それ以下は遺構が切りあっていた。トレンチの東側は褐色土(40cm)、黄灰色粘質土(60cm)と続き、その下から明黄褐色土(地山)が30cm厚で検出され、その下は砂利盤であった。西側は灰色土(15cm)、褐色土(145cm)、灰色粘質土と続いており、深さは305cm掘っても地山に当たらなかった。このトレンチは、西端に大型の石が集中しており、これらは石垣か何かの痕跡とも考えられる。遺物については、越前焼、土師器皿、須恵器、布目瓦等の破片などが検出されている。

第9地点 地表より70cmは盛土であり、その下から明黄褐色土(30cm)が検出された。これは遺構面と考えられる。この面では落ち込み状の遺構(大きさがトレンチ外に伸びておりはつきりしない)が一箇所検出されたが、遺物は検出されなかった。この明黄褐色土の下は褐色土(40cm)、暗赤褐色砂利層(10cm)、青灰色砂質土(10cm)、褐色砂質土(15cm)、黄灰色土(25cm)と続き、明黄褐色土(地山)が検出された。このトレンチは東側に地山を掘り込む形で100cm程度の落ち込みがあり、暗灰色粘質土が堆積していた。その土からは越前焼と思われる破片が検出されている。遺物については、越前焼、土師器皿、須恵器等の破片などが検出されている。

第10地点 地表より100cmは盛土であり、それ以下は灰色粘質土(20cm)、褐色砂利(35cm)、暗赤褐色砂利層(10cm)、青灰色粘質土(45cm)と続き、青灰色砂質土(地山:50cm)が検出された。この層の下は青灰色砂利(地山)であった。このトレンチはトレンチ南側1/3を北西-南東軸方向で北側を切る形で遺構が検出された。そして、その軸に沿って杭が3本打ち込まれていた。遺構の規模はトレンチ外に及んでいる為不明である。遺物については、この落ち込みの土から越前焼、天目茶碗、土師器皿等の破片が検出されている。

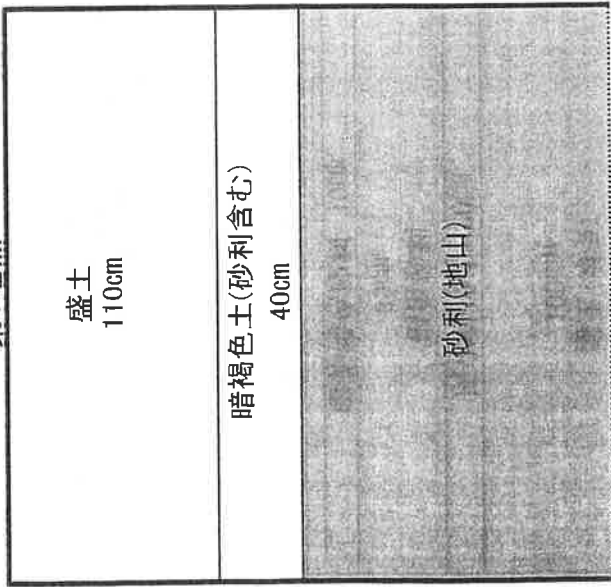
以下、各地点での様相から遺跡の性格を考えてみたい。各地点での様相は地点によって様々であり、遺構面として問題ないと思われる面が検出されたのは第9地点のみである。第2地点、第5~6、8、10地点でも一部確認されたが、トレンチ内という限られた範囲では一部しか見受けられなかったため、断定するには不十分であった。全体の様相から考えられるのは、地表面から70cm~100cmの深さで第1遺構面、130~160程度の深さで第2遺構面が検出される可能性があるということである。試掘段階での推定ではあるが、遺物から第1遺構面は中世(後半)及び近世、第2遺構面は中世(前半)と考えられる。古代については遺物が検出されているのみで、遺構は確認されなかった。

調査トレンチ配置図

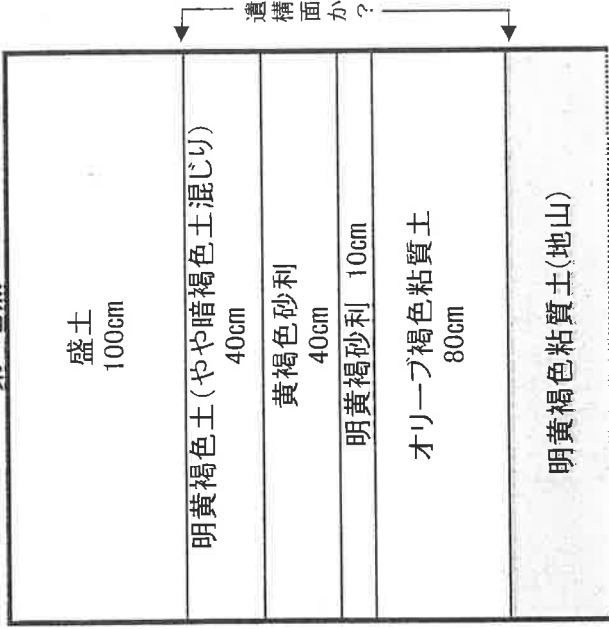


府中城跡土層柱状図

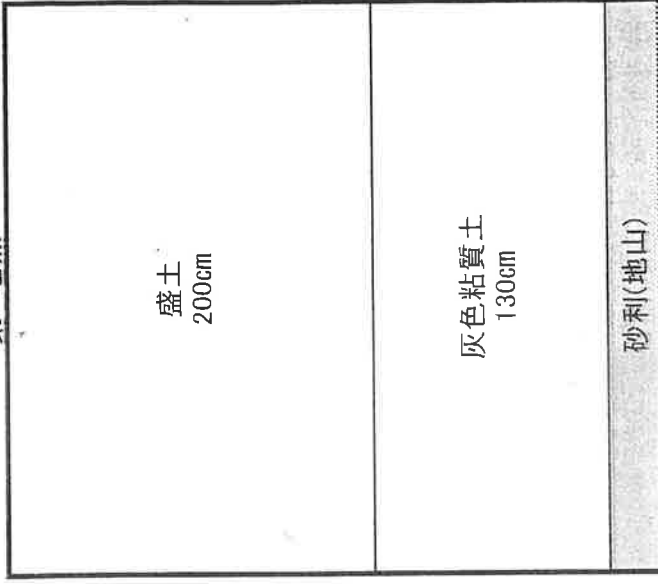
第1地点



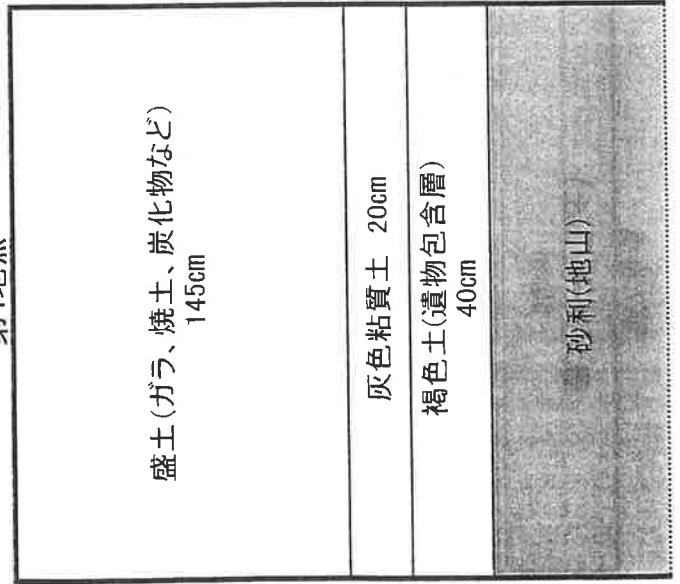
第2地点



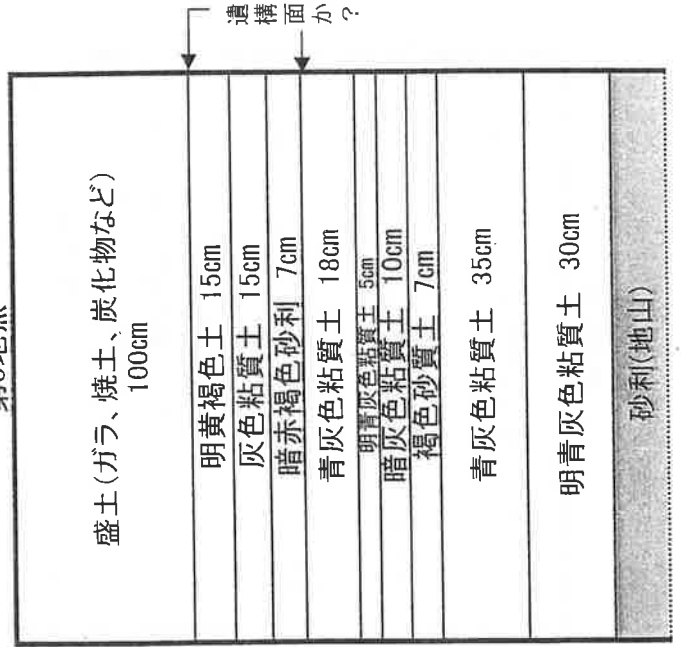
第3地点



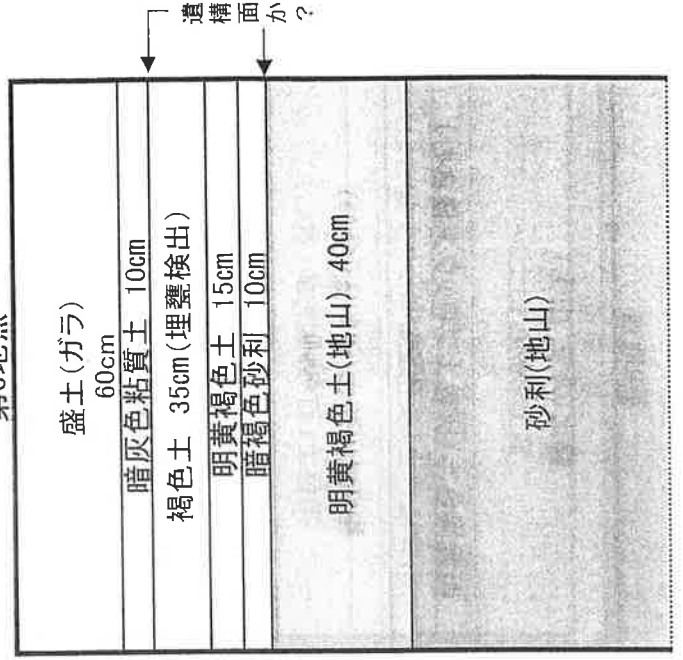
第4地点



第5地点

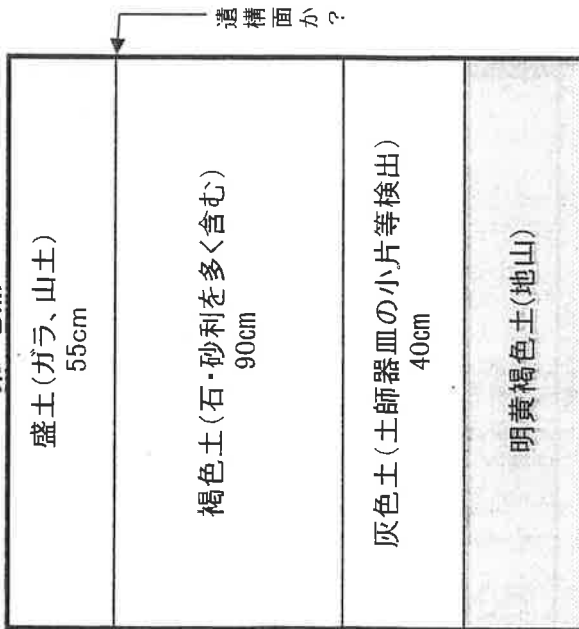


第6地点

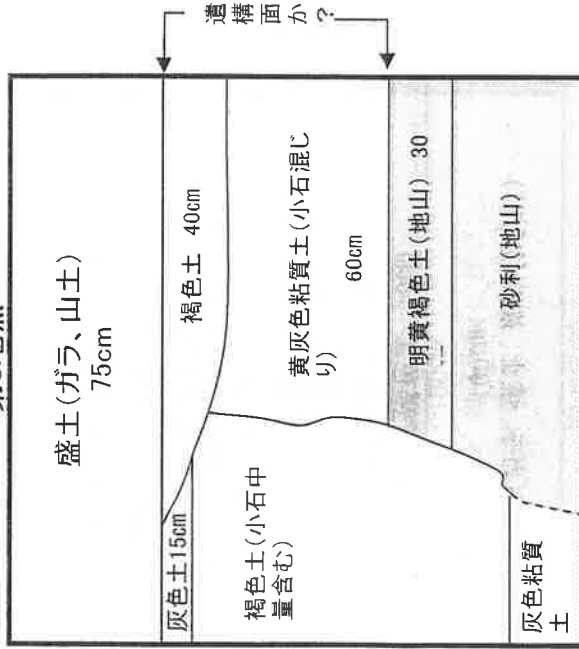


府中城跡土層柱状図

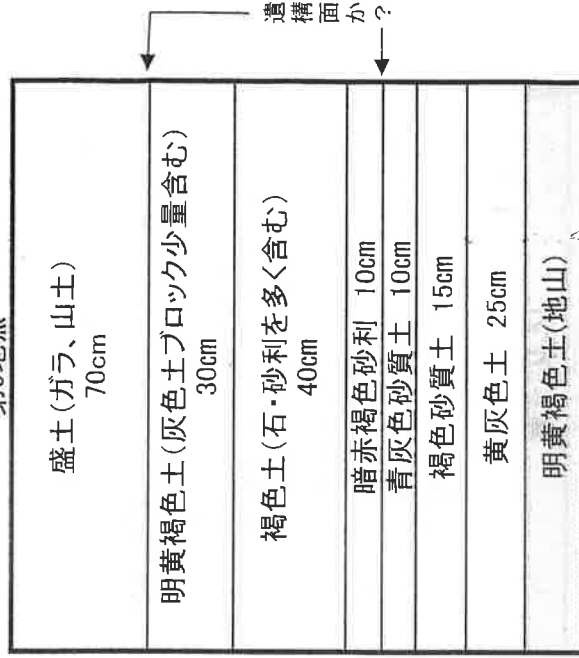
第7地点



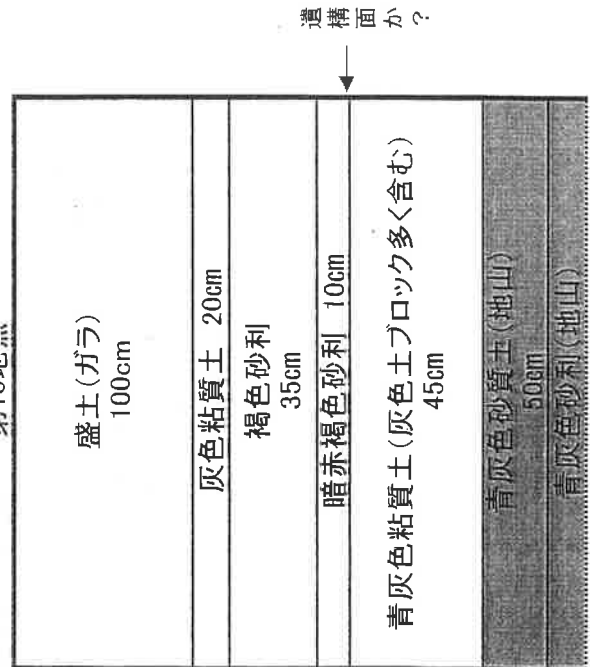
第8地点

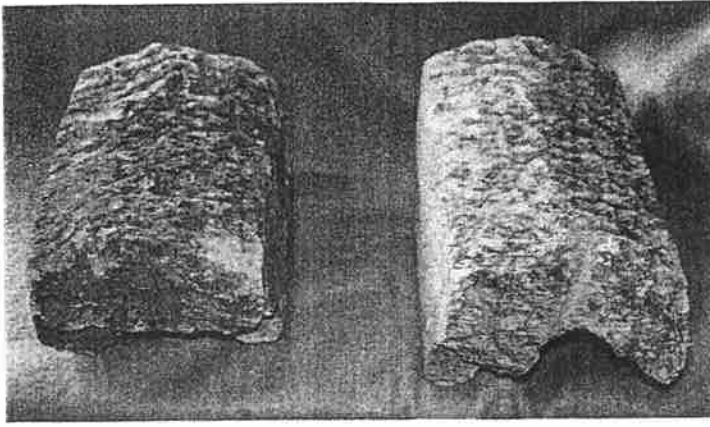


第9地点

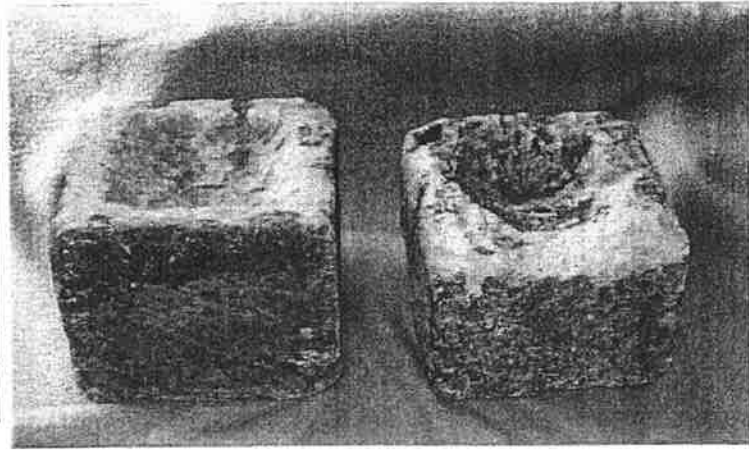


第10地点

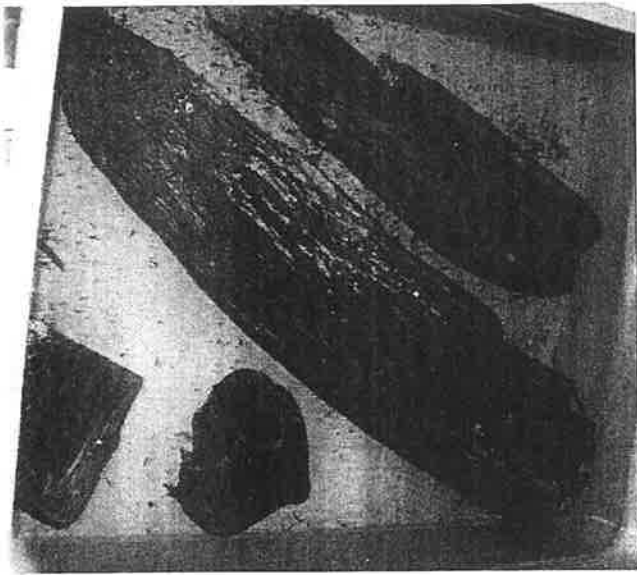




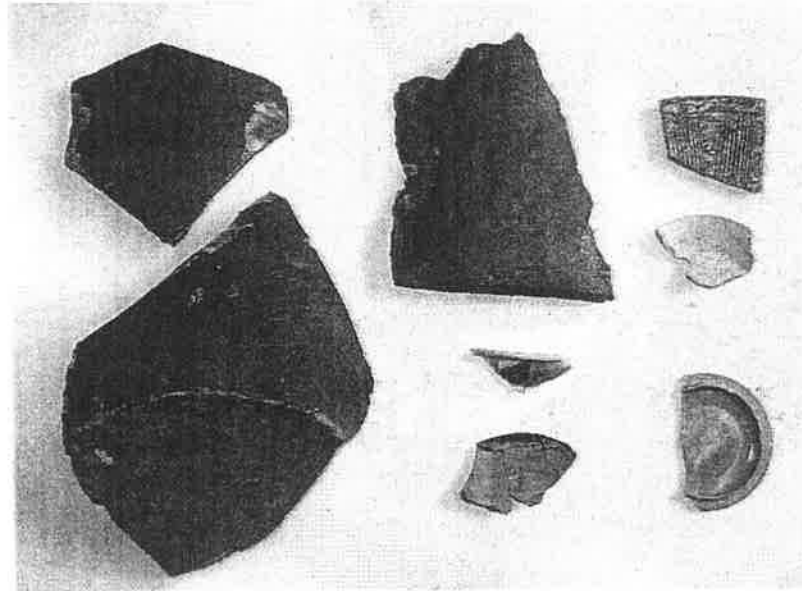
石瓦



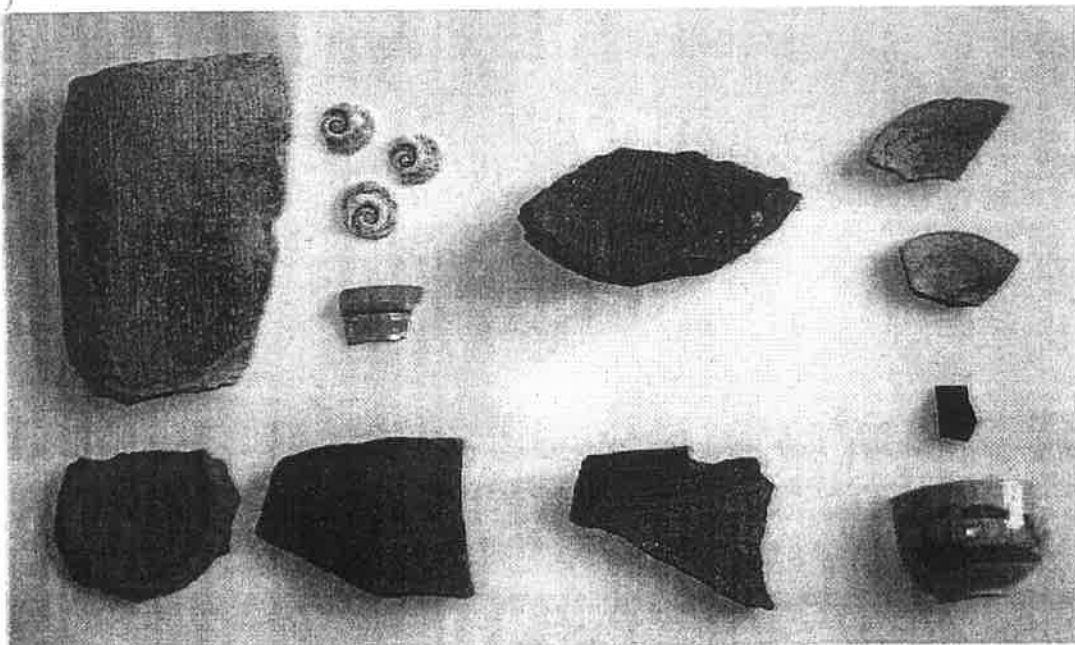
五輪塔



木製品 (杭)



土器・陶磁器・瓦



土器・陶磁器・瓦・自然遺物 (サザエの蓋)

